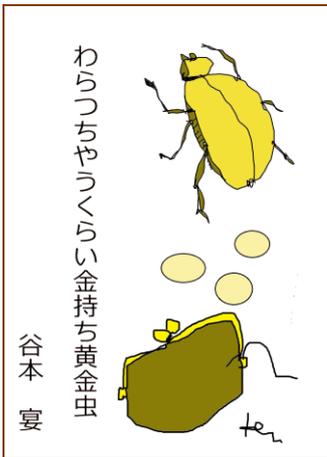




犬掻きの鼻先に来る夏の波

田中やすあき

犬かきで沖に向かって泳ぐのは大変だね。なかなか進まない。泳いでいるのは作者で人間なのだが、まるで自分が犬になったような感覚になる。



わらわちちやうくらい金持ち黄金虫

谷本 宴

もしも黄金虫が純金でできていたら…。確かに笑いが止まらないね。もしも、太刀魚がプラチナでできていたら…。哀しいニュースより楽しい空想を。



私からこぼれたやうに花柘榴

山本 賜

筒状の肉厚の萼に包まれて、八重の花をつける。観賞用で実はつけない。紅い花の少ない時季にひとときわ目をひく。こぼれたのは情念か慈愛か。



水割に夏の音させショットバー

吉川正紀子

いきつけのバーに行く。顔なじみの常連に会釈をしてカウンターに座る。「いつもの」と言えば、バーテンダーが好みの味をマドラーでひと混ぜ。



天守閣でんぐり返し夏燕

西野周次

天守閣の側で燕がぐるりと宙返りするように飛んだ。その瞬間、作者は燕と一体になり燕の視点になったのである。天守閣はぐるりと一回転。



無尽蔵の滝浴び心無一物

柳 紅生

瀧水を浴びる時、それほど信心の心はなくとも敬虔な気持ちになるものである。尽きることのない水を一身に受けていると、心が洗われ空っぽに。